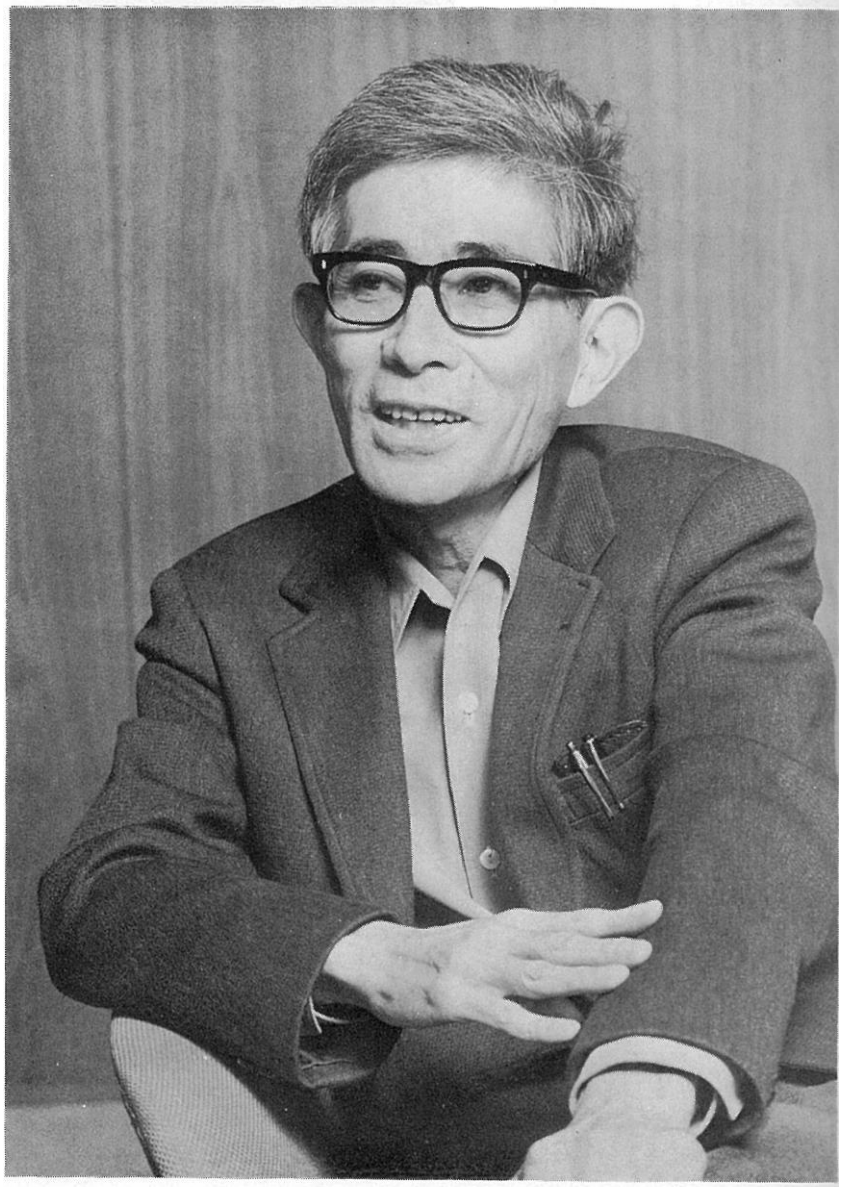
研究生活四十年

—農地工学確立への道—

山崎　不二夫



父・山崎　貞（1911）
英語の友編集時代

学習院初等科　兄・洋と共に（1917）

父と兄と不二夫４歳（左端・1913）

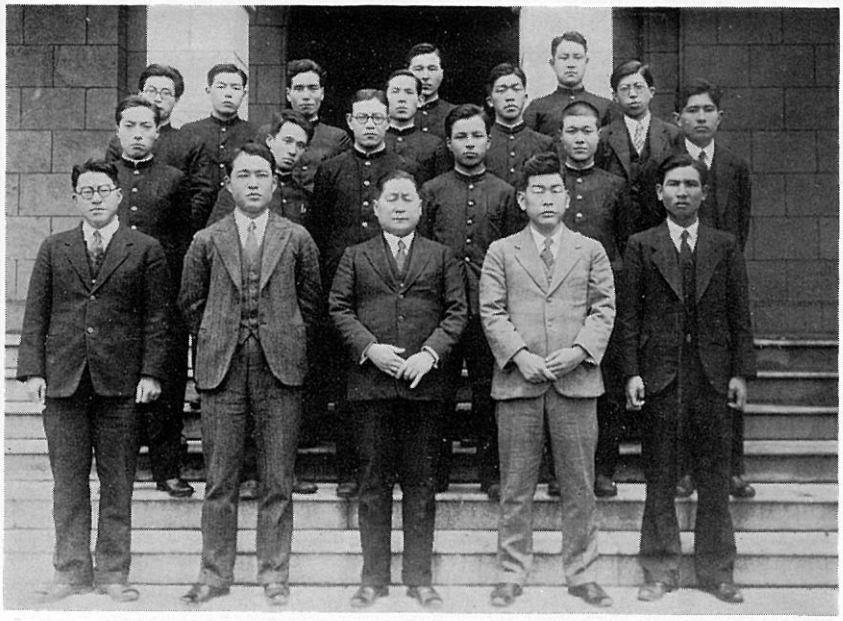
小学時代

高校時代・秩父西沢七ツ釜にて
左から山崎，浦口健二君，花輪誠一君

ラグビーの仲間・大学1年・左から4人目

藤咲く頃・家族と共に自邸にて（左端不二夫・1925）

浦口健二君（左）と志賀高原にスキーに行く



1935年３月卒業生と共に（前列左から福田仁志助手，江口武夫講師，田中貞次教授，秋葉満寿次助教授，庄司英信助手，２列目右端山崎）

降下毛管浸透の実験装置と松坂君

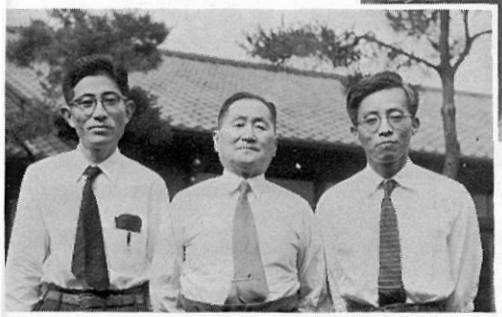
測量実習，右端山崎

元駒場社会科学研究会のメンバーと，自宅にて（1960頃）

東京農専農業土木科第一回卒業生と共に（1949）

東大教授時代

農地工学専攻生の諸君と自宅玄関先にて（1951）



左から山崎，田中貞次前教授，八幡助教授（1952）

農地工学研究室の仲間たち（1957）

定年退官前の惜別会（1969）

自宅庭にて，
涼子，耕宇，不二夫
（1958頃）

教育大菱沼教授（右端）の
しろかきの研究に協力

北海道・大沼にて（1974）

ベトナムでファン・バン・ドン首相と
（1973）

日本科学者会議創立10周年記念集会
（1975）

孫たちにかこまれ
自宅の庭にて
（1978. 12. 10）

はしがき

私は来年一月満七十歳になります。父は私が大学生のとき四十八歳でなくなりました。そのころは人生五十といった時代ですから、とくに若死にとは思わず、自分も父のように五十までにしっかりした仕事をして死にたいなどと考えていました。その年齢をもう二十年も超えて生きてきたことになります。

男子の平均寿命が七十何歳になった今、古稀という言葉は時代おくれになりました。先日、親しい人たちから、私の古稀を祝う会をしたい、ついてはそれに間に合うように回想録を書いてほしい、という話があったとき、喜寿か米寿ならともかく、古稀はもう意味がないと言って辞退しました。しかし、一つの区切りだから是非とすすめられると、この一、二年来持病がやや進み元気がなくなったのを皆さんが心配してのことと思われるので、この「ひと区切り論」をありがたく受け入れ、回想録を書く気持になりました。幸い今までに父のこと、研究のことなど思い出を書いたものが多少あったので、それをつなぎ合わせ、足りないところを補う形で筆を進めました。それでもやはり時間切れになり、たいへん粗雑なものになってしまったことが残念です。

人間誰しも、うぬぼれがあり、見栄があります。自分のこととなると、書く事柄をしらずしらずのうちに取捨選択し、あるいは自分のしたことに都合のよい解釈を加えがちです。すぐれた自叙伝を書くには、自分を正直にさらけ出す勇気、あるいは世俗を超越した枯淡の境地が必要でしょう。あいに

く私にはその両方とも欠けています。ですから平凡な一科学研究者の単なる回想にすぎません。ただ、明治の末に生まれ、大正から昭和の初めにかけて青春をすごし、戦中・戦後の激動の中に壮年時代を生きてきた人間の回想の中には、はげしく変転した時代の断面が現われるはずです。七十年の歳月のうちになにが変り、なにが変らなかったのか、そんな点にあるいは興味を感じていただけるかもしれません。

書き終って強く感じたのは、今までよく考えてみたことのなかった過去の自分の思想や行動の意味が、一生を順序立てて振り返ってみたおかげで、いろいろはっきりしてきたことです。これは予期せざる収穫でした。

一九七八年十二月

山崎　不二夫

目　次

はしがき……一

一　生い立ち
——小学・中学時代——

生まれた環境……九
学習院にはいる……一〇
関東大震災にあう……一一
一高受験……一三

二　あらしの中で
——高校・大学時代——

八ヶ岳遭難……一六
東大農学部へ進む……二一
プロレタリア・エスペラント運動……二三

父の死、その生涯、思い出……三
科学研究の道を選ぶ……五一

三　病気と研究生活
——東大助手時代——

肺病とのつきあい……五六
研究生活への出発……六三
北支への旅行……六八

四　戦中・戦後
——東京高農教授時代——

降下毛管浸透の研究……七七
喀血して休養、俳句を始める……八一
空襲下の生活……八四
農業土木科の創設……八八
職員組合の活動……九一
学位論文を仕上げる……九三

秋葉先生のこと……九四

五　東大に帰って
——東大助教授時代——

学内民主化運動……九六
胸郭成形手術を受ける……一〇〇
菱沼達也氏との出会い……一一〇

六　研究と改革
——東大教授時代——

開墾の研究……一一三
水田の浸透に関する研究……一一六
亀裂排水の研究……一一八
新中国を訪ねて……一二〇
関東ロームの共同研究……一二五
ロシア語のゼミと『土壌と水』の翻訳……一三〇
学科の研究体制の民主化……一三三

『土壌物理』の出版……一四〇
定年で東大を去る……一四三

七　気ままな生き方

——定年後の生活——

農地工学の体系化の試み……一四九
四十年の研究生活をかえりみて……一五四
農業土木学会との関係……一五七
学術会議の大学問題特別委員会……一五九
「ベトナムにおける戦争犯罪調査委員会」……一六三
科学者運動とのかかわり……一七七
太陽コンサルタンツへ入社……一八四
山崎農業研究所の発足……一八六
再び研究に戻る……一九三

八　エッセイ

台風季節に想える……一九六

情実と生活原理……一九九
堤防と牧草……二〇〇
弱者の暴力……二〇一
検討要する治水策……二〇二
地力増進は心土改良から……二〇四
活発に議論をしよう……二〇五
八郎潟と農地工学……二〇六
『農業土木研究』の思い出……二〇八
農業用水汚濁の問題……二一〇
農業土木学会長としての五ヵ年を振返って……二一二
働く仲間をつくり農業に生きがいを……二一四
市域内の農地は都市に不可欠な「施設」だ……二一五
食物は外観より味と栄養だ……二一六
限りある水、工業用水のムダなくせ……二一七
小規模土地改良も差別せず十分な補助を……二一八
再び美しい日本を……二一九
前川忠夫さんに期待する……二二〇
『現代人の科学』の刊行にあたって……二二一
憲法と科学……二二四

自転車練習の記……二三〇
マイペース酪農……二三一
農業用水の意味とその将来……二三三
論文・著書　目録……二三六
略　歴……二四〇
古稀記念出版　刊行に当って……二四三
山崎不二夫先生の古稀を祝う会　代表　竹　中　肇

古稀記念出版　刊行に当って

山崎不二夫先生の古稀を祝う会(代表)　竹中　肇

山崎先生が古稀を迎えられる。本当におめでたいことであり、心からお祝いを申し上げる。

先生の長い四十年の研究・教育生活を通じて、直接の御指導をいただいた人間はかぞえきれない。その多くの者は今や社会の第一線で活躍の最中であり、先生のよい意味での影響力は、津々浦々にまで広まっているともいえる。

東京高等農林学校（東京農専）時代、また東京大学時代の先生は、常に新しいものへの創造の努力と研究心、さらには真剣な教育への熱情に満ちあふれておられた。時には近寄り難い厳しさの反面、常に組織の民主的運営につくされたように、ちゃんと他人の気持を理解される面を備えておられた。

御多忙の研究・教育生活の中から、学術会議の民主的運営のために努力された御功績も、本当に先生ならではと頭の下る思いである。

山崎先生から見れば、われわれ門下生は、多くの場合、決して満足できるような代物ではなかったと思う。われわれ多くの者は直接、先生の高潔な人格に触れながら、なおかつ向上への努力が必ずしも充分ではなかったように思う。しかし、山崎先生の周囲は、いつも自由で 明るい空気に 満ちあふれており、先生の広い包容力と指導力が、気付かぬうちにわれわれを次の段階に押し上げているので

あった。

先生はまた意味のない形式化を、非常に嫌われたし、権威主義に対する反発も持っておられ、その意味でも、リベラルな立場を堅持された人である。先般七十歳を迎えられたとき、その永年の御功績に対する政府からの叙勲の話を、あえてお断りになられた、その態度にも自由人としての先生の信念をうかがい知ることができる。

今般、古稀をお祝いする記念出版に、快く応じていただき、御多忙な中を、研究生活四十年をふり返って、約四〇〇枚にわたる原稿を御執筆いただいたのは、本当に有難いことである。とくに右手の具合がわるく、ペンを不自由な左手にもちかえて、御執筆いただいたその原稿を拝見するとき、今更ながら、先生の強い精神力に打たれる思いである。まとめていただいたその中味は、七十年にわたり大きな足跡を印した人物の、人間としてのきわめて貴重な記録であるのみならず、また、農業土木学、とくに『農地工学』の確立をめざされた尊い歴史の跡でもある。

この原稿を拝見し、われわれはまたあらためて、このような山崎先生から教えを受けたことを有難く思う。幸いに先生はお元気で、第一線のレベルの研究論文を、学会誌に続々発表しておられる。どうかいつまでもお元気な御活躍をお願いしたいし、本書の刊行が、先生の次の新しい活力となることを心より期待したい。

山崎先生、本当におめでとう。

山崎不二夫先生の古稀を祝う会　発起人（五十音順）

発起人代表

竹中　肇
石川武男
今岡　浩
岡崎義雄
小出　進
椎名乾治
須藤良太郎
丹原一寛
徳永光一
長田　昇
原田　勉
福岡喜弘
水之江政輝
安富六郎

浅原辰夫
伊藤　實
岩田進午
片谷充克
近藤鳴雄
繁沢健夫
相馬恒一
塚原真市
中川昭一郎
中村忠春
東山　勇
古屋千在
宮内定基
山崎四郎

足立忠司
井上完二
上野久雄
神山恵三
桜井　誠
鈴木芳夫
多田　敦
寺沢四郎
長崎　明
華山　謙
菱沼達也
本田勲夫
望月由三
山田民雄

新垣雅裕
井上喜一郎
宇賀田　浩
熊沢喜久雄
佐藤洋平
須藤清次
田淵俊雄
寺西輝芳
中島哲生
浜林正夫
平田　熙
松坂正次郎
本谷　勲

研究生活四十年　山崎不二夫
——農地工学確立への道——

一九七九年二月一〇日刊（私家版）

発行所　山崎不二夫先生の古稀を祝う会
事務局　東京都新宿区四谷三丁目五番地
太陽コンサルタンツ株式会社内
電話　東京　三五七—六一三一（代表）

編集・製作　新制作社